

そだちのねっこ

～乳幼児期の遊びより～



「すごいでしょ～、こんなこともできるんだよ！」

～安心基地からの第一歩 全身を使って～



教育センター所報
12月号掲載

11月7日(火)、0歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

中庭で、大好きな保育者に見守られ、時には抱っこされながら元気に遊んでいました。

歩けるようになった子どもは、壁をタッチしに行ったり、狭いところに入ったりしていました。

ハイハイで自由に動くことを楽しんでいる子どもに「どこ行くの?」「何があるのかな?」と声をかけ、保育者も同じようにハイハイをして視線を合わせて寄り添っていました。

「ボールを渡したらどうするかな?」「トンネルくぐりはできるかな?」など、子どもたちの発達段階と興味・関心を考慮しながら、かかわり方を試す保育者の姿も多かったです。「ど～ぞ」とボールを渡されたり「ちょうだい」と手を出されたりする経験を繰り返すことで、ものを介して人とのかかわりも体得していきます。



ままごと遊びのコーナーでは、保育者から「ごはんどうぞ!」「お茶いれますか?」とコップを渡された子どもがコップとコップをぶつけてカンカン音が鳴ることに気づき、嬉しくて何度も鳴らしていました。その様子に「コップはそんなことをするものじゃないよ」と子どもの行動を止めるのではなく、「音鳴るね～」「カンカン言ってるね～」と肯定的に捉えて共感し、自分で音を鳴らせたことを認めていました。

また、風船マットでは、上によじ登り、座ったり寝転んだりしている子どもや体を安定させようと全身でバランスを取っている子どももいました。「おっとっと～」と言いながら、助けてくれる保育者がそばにいることも安心して楽しめる要因となっています。



歩く・押す・つまむ・ひっぱる・めくる・叩く・持つなどの動きを楽しみながら、様々な運動機能も発達していきます。いろいろなものを見て触って感じて、自分の周りのものを認識し、どういうものであるかを獲得することが嬉しい探索活動につながります。子ども自ら「やってみよう」とする気持ち、そして行動こそが、好奇心であり、自我の芽生えであります。

一人ひとりの笑っている、泣いている、怒っているなど、すべての姿を受けとめてもらい、温かく見守られることで子どもたちの心は安定します。そんな安定した環境(=安心基地)から一歩出てみようとする、気持ちを大事にして保育していることもよくわかりました。

一歩外へ出てまた戻ってこられる、子どもたちにとって居心地のよい安心基地(=保育者)であり続けたいと思いました。